

医療ルネサンス

No.7238

意思決定

「<sup>おも</sup>想い」を支える

1/6 3/12 2/12

# 人工呼吸器「装着」の1択

重症筋無力症を患う押富俊恵さん(38)の暮らしは案外、ふつうだ。

歩けないし自力では呼吸器につながつている。声帯の機能も失った。のどの奥で音をつくる発声法を身につけたが、体調が悪いとそれも難しい。肺炎で年に5回は入院する。

それでも、愛知県尾張旭市のマンションで、母(67)と暮らす。好きなものを食べ、好きな服を着て、夜でも雨でも車いすで出かける。仲間とつきあい程度に酒も飲む。障害者問題の啓発や地域活動をするNPO法人「ピース・トレーニング」の代表理事も務める。

押富さんの長い治療も、生きることも、日々の「意思決定」と共にあった。それは決して、たやすい道ではなかったけれど――。

発病は、病院の作業療法



乗るに近づくを押富さん(愛知県尾張旭市)を撮影する散策(愛知県尾張旭市)の尾張

士だった24歳の時。大病院で、重症筋無力症と診断され、入院した。筋肉と神経のつなぎ目に異常が起り、全身に脱力や筋力の低下が起きる難病だ。職場に戻るともりだったのに、症状はどんどん悪化した。

車いすで病棟の廊下に入った夕方、突然、呼吸が止まった。救命措置のため、一時的に人工呼吸器が装着された。「息もできないのに、私、何で生きてるの」。個室のベッドで目覚め、不思議だ、と感じた。

装着時、押富さんの意思は確認されていない。けれど、あの時だけは「装着する」という1択でよかったと言っ。自分で決めるための「暮らしの情報」が一切なかったからだ。

人工呼吸器をつけて外出できるの？ 助けられるの？ 私の意思は伝えられるの？ そうした具体的なイメージを、全く持ちあわせていなかった。人生を諦めたくないからこそ、暮らしを楽にできないこと」に次々と直面し、それを乗り越えてきた障害者は、高齢社会の「水先案内人」だ。押富さんの経験や折々の想いをたどり、意思決定を支えるための課題を探る。

(このシリーズは全6回)